

江戸時代日本における中国語受容の一形態 ——「櫻桃花」をめぐる

蔡 雅芸

一、はじめに

江戸時代において日本人は鎖国政策により海外への渡航が禁止されていたが、外国人に接する機会が完全に断たわけではなかった。中国の貿易船が来航する唯一の対外貿易港長崎において、日本人が中国人に接し、中国語を通じた言葉の交流があった。

18世紀前半の成立と考えられる『華客答問録』は、日本人と中国人の対談内容を中国語で記録された一資料であり、その内容から、日本人が中国人から中国に関する様々な情報を尋ねた様子が窺える¹。その中に「櫻桃花」に関する問答があり、この問答から見ると、江戸時代の日本人は日本の「桜の花」は中国語で「櫻桃花」と言っていたことがわかる。ところが、日本に渡航してきた中国人が日本の桜の花を見て、それを「櫻桃花」とは言わなかったので、日本人が驚き、日中の中の「櫻桃花」に関する認識の相違に気づいた。

「櫻桃花」と言えば、中国においては果実が食用の櫻桃の花のことであり、櫻桃は『礼記』などの典籍にその記述が見られている²。櫻桃は実桜の一種であり、実桜は「支那実桜」と「西洋実桜」に大別され、中国の典籍に「櫻」、または「櫻桃」として登場するのは「支那実桜」である。「支那実桜」が日本に伝来したのは明治10年(1877)頃だと言う³。つまり、江戸時代の日本においては「櫻桃」も実在していなければ、「櫻桃花」も勿論ないのであり、日本の風土から考えると『華客答問録』に見られる「櫻桃花」は日本の桜である可能性が高い。『華客答問録』の内容に限って見ると、恐らく、日本人は漢籍の中の「櫻」と「櫻桃」と「櫻桃花」という「櫻」字が付く語彙を全て日本の桜に当てて認識したため、桜の花を「櫻桃花」と言ったのではない

¹ 蔡雅芸『『華客答問録』から見る江戸時代の言語接触』に挙げており、『アジア文化交流研究』第4号、関西大学アジア文化交流センター、2009年3月、643頁～674頁参照。

² 『礼記』「月令」に「天子乃以雛嘗黍羞、以含桃先薦寝廟」とあり、「含桃」は「櫻桃」だとされている。寺山宏『和漢古典植物考』、八坂書房、2003年3月、275頁参照。

³ 寺山宏『和漢古典植物考』、274頁。藤善真澄「さくらんぼの来歴」、『中国史逍遙』、2005年3月、62頁参照。

かと推測できる。しかし、『華客答問録』は成立の背景が不明であるため、このように桜の花の中国名を「櫻桃花」と言うことは『華客答問録』に限った特例なのか、それとも、それは江戸時代における普遍的な言い方なのかについて検討する必要があると思われる。それは中国語の場合、ときおり文語表現と口語表現がかなりかけ離れていることもあることも留意する必要があるだろう。

そこで本稿は、日本の「櫻桃花」を手掛かりに、唐話資料と漢文資料を通して江戸時代における中国語の受容の形態の問題について考察するものである。

二、江戸時代日本における中国語受容

1) 漢籍伝来と漢文受容

古来、中国の文化は人と書物により日本に伝えられている。日本に中国の文化を伝えたのは、遣唐使や入唐僧などのように中国へ行った日本人と、中国から日本に渡来した中国人の両方が考えられる。また、中国の書籍が初めて日本に伝わった記録は『古事記』に見られ、応神天皇の時に王仁が朝鮮半島の百済から『論語』と『千字文』を伝えたとされる。以来、様々な漢籍が日本に伝来し、日本人は漢籍の解説に所謂「漢文訓読法」を考え出し、返り点を打つことにより、中国の文章を日本語のように読みかだしてきた。日本に輸入された漢籍に関しては、大庭脩氏の『漢籍輸入の文化史』⁴、『江戸時代における唐船持渡書』⁵などの成果に詳しい。

「漢文訓読法」さえできれば中国語の話せない日本人でも中国の文章が読めるため、「漢文訓読法」は、日本人にとって漢籍の読解に便利な方法であり、その便利さにより、日本において、中国語が話せるかどうかとは無関係に、もっぱら漢文の読み書きができる専門の漢学者が育てられた。江戸時代の漢学者の中で、雨森芳洲（1668—1755）のように、中国語の口語の学習に熱心な人もいれば、荻生徂徠のように「唐音直読論」を説き、漢文を書き下して読むのではなく、中国語の語順に従って読むことを提唱した人もいるが⁶、漢籍の伝来に伴い、日本の漢学の世界において、中国語は主に文章語として受容されていた。

2) 唐船貿易と唐話

⁴ 大庭脩『漢籍輸入の文化史—聖徳太子から吉宗へ—』、研文出版、1997年1月。

⁵ 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所、1967年3月。

⁶ 奥村佳代子『江戸時代の唐話に関する基礎的研究』、関西大学出版部、2007年3月、5頁参照。

日本人は、漢籍の解読のみなら「漢文訓読法」では十分であろうし、漢文さえ書ければ文通、或いは筆談で中国人との意志疎通も問題ない。しかし、文字を書くことは場所などに制限され、必要な時に随時に書けるものではない。それに、漢字が読めない中国人が相手の場合は漢字が役に立たないなど、日中両国の交流において、どうしても漢文の読み書きだけでは対応しきれない場合がある。そういう時に、日本語も中国語も話せる人が必要となり、江戸時代においてこの通訳の役割を果たしたのは、主に長崎の唐通事であった。

江戸時代の「鎖国令」のもとに長崎は唯一の海外貿易港として開かれ、日本の対外事務の窓口としての役割を果たしていた。長崎に渡航して貿易ができたのは中国とオランダの船のみであり、江戸時代において日本は中国人を「唐人」、中国船を「唐船」、中国との貿易を「唐船貿易」や「唐人貿易」と呼称していた。唐通事は唐船貿易の対応に長崎で設けられた役職で、唐船が入港してから帰帆するまでの過程において様々な業務に携わり⁷、言葉の通訳をはじめ、唐人から海外情報を聴取し「風説書」を作成することや、唐人の生活の管理などがその職務である⁸。また、日本に渡航してきた唐人が話す言葉は主として出身地の方言であるため、唐通事はその家に引き継がれた先祖の出身地の方言により、「南京口」「漳州口」「福州口」に分けられ、仕事に携わっていた⁹。

唐通事となるには中国語が堪能である必要があり、唐通事に登用された者は原則的に唐人或いは唐人の子孫であり、唐通事は世襲されることが普通であるので、唐通事の子弟は幼い頃から中国語（唐話）の教育を受けるのは通常である。唐通事の唐話教育に『三字経』、『大学』、『論語』、『孟子』、『詩経』などの中国の典籍、「二字話」、「三字話」「譯家必備」、「両国譯通」などの唐通事が編集した冊子が教科書として使われ、その他、「俗語彙編」、「譯官雜字簿」、「華語詳解」さらに岡島冠山の「唐話纂要」、「唐語使用」なども入門の必読書であった。また、会話の学習に白話の小説がふさわしい学習書とされているため、『三國志演義』、『水滸傳』、『西湘記』などの白話小説も唐話の学習に使われていた¹⁰。

3) 漢学と唐話学の関係

江戸時代に禅宗の一宗派である黄檗宗が日本に伝来し、黄檗宗の禅僧が幕府に優遇され、

⁷ 「唐船入津ヨリ出帆迄行事帳」、片桐一男『鎖国時代対外応接関係資料』、近藤出版、1972年6月、5～9頁参照。

⁸ 山崎悌二郎『長崎の唐人貿易』、吉川弘文館、1964年4月、294～296頁。

⁹ 浦廉一「華夷変態解題—唐船風説書—の研究」上冊、東洋文庫、1955年3月75～76頁。

¹⁰ 石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』、清水弘文堂書房、1967年9月、14頁参照。

老中の柳沢吉保が唐話を学んで自ら中国人の黄檗僧と問答することも度々あった。そこで、柳沢吉保の儒臣である荻生徂徠（1666－1728）が唐話を学ぶ必要性に迫られ¹¹、「訳社」を結成し、その訳社に唐話学者の岡島冠山（1674－1728）が講師として招かれた。かつて長崎で通事の実験を持つ岡島冠山は、唐話は勿論のこと、中国の白話小説にも堪能で、和刻本『忠義水滸傳』に訓点を施した。前述したように『水滸傳』、『西湘記』などの中国の白話小説は、唐通事の唐話教育に役立つものとされており、唐話の世界においては必読書となっているが、従来、文学においては専ら詩賦文章が正宗とされていたため、白話小説などの俗語文学は漢学者に排斥されていた。ところが、漢学者が唐話を学ぼうとすれば中国の白話小説を読むことが有益になるわけで、白話小説が唐話教育の一環として唐話に関心を持つ漢学者にも歓迎されるようになった。それ以来、荻生徂徠等の学者も『水滸傳』を読んでいたなどとされるように、白話小説はそれまで排斥されていた状況も変わりはじめ、やがて学問を職業としない人々にも広まり、人気を呼ぶようになった。このように、荻生徂徠が中心となる訳社は、漢学と唐話学の重要な接点となり、岡島冠山をはじめ、この訳社の活動に交わる人達を通して唐話が唐通事の世界から漢学の世界へと広まった。

ところで、漢学者でありながら、唐話の学習に熱心であった荻生徂徠であるが、彼の唐話は如何なる程度のものであったろうか。それについて石崎又造氏の『近世日本に於ける支那俗語文学史』に「荻生徂徠新黄檗章悦峯筆語」¹²が収められており、この資料を通して荻生徂徠の唐話についての実力を見ることができる。現在見られる荻生徂徠の資料は例えば『徂徠集』など、勿論のことだが漢文体で書かれるものが殆どであるので、この筆語資料は荻生徂徠の関連資料としては珍しいものだと思う。また、面白いことに、この筆語の内容に日本の桜の花に関する問答があり、次にこの問答の内容を見てみよう。

4) 荻生徂徠が黄檗僧悦峯に質問した「櫻花」と「櫻桃花」

荻生徂徠が柳沢保吉の儒臣となってから一番親交があった黄檗宗の禅僧は悦峯道章である。悦峯道章は、浙江省杭州府の出身であり、貞享三年（1686）長崎に来航して興福寺第五代の席を継ぎ、宝永四年（1627）檗山第八代の席に上った¹³。宝永四年九月紫雲山瑞聖寺甘露堂で、徂徠は始めて悦峯と会談した。その時の筆語を記録したのが「荻生徂徠新黄檗章悦峯筆語」であり、石崎又造氏の解説によると、これは恐らくその日に同席していた徂徠の弟子安藤東

¹¹石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』8頁参照。

¹²石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』56～60頁参照。

¹³石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』、46頁参照。

野が筆記したものだろうという¹⁴。

「荻生徂徠新黄檗章悦峯筆語」の内容は、一問一答の形式となっており、この筆語資料に徂徠の発言は「質問」と「回答」を合わせて計45条見られるが、日本の桜に関する問答が一つある。その内容は次の通りである。『近世日本に於ける支那俗語文学史』に収められている資料を縦書きから横書きにしたため、漢文訓読の記号を省略した。問答の（徂）は荻生徂徠、（悦）は悦峯道章である。

（徂）日本的櫻花不識是櫻桃花麼、或者海棠花麼。

訳：日本の桜花は櫻桃花でしょうか、それとも海棠花でしょうか。

（悦）海棠不是櫻桃、日本櫻花唐國不能相及

訳：海棠は櫻桃ではない。日本の桜花は唐国のより素晴らしい。

短い問答であるが、日本の「桜花」は「櫻桃花」であるかどうか、それとも「桜花」は海棠花なのかどうかと荻生徂徠が悦峯道章に聞いていることから、徂徠は日本の桜の花は中国では何の花なのかについては分からないように見えた。また、この問答から、徂徠は日本の桜の花を「桜花」と言っていることも分かる。一方、悦峯の回答を見てみると、海棠は櫻桃ではないと答えたことから、悦峯は徂徠の言った「櫻桃花」を「櫻桃」の花と解したうようで、日本の「桜花」は「櫻桃花」であるかどうかについては直接に答えてはいなかったが、日本の桜の花を「桜花」と称したのは徂徠とは同様である。

これで、日中双方の桜の花の呼称に使う言葉が一見「桜花」で揃ったように見える。しかし、江戸時代、桜の花を中国語でどういうかについては、後節で述べるが、江戸時代の資料『華客問答録』に、日本に来て日本人に桜の花のことを「櫻桃花」だと言われると、それと同じような花は自国にはないと言いながら、そのまま日本人の言い方に従い、「櫻桃花」を使って会話を続けた例もある。そこで、一体、江戸時代は桜の花を中国語で「桜花」というのか、それとも「櫻桃花」というのかについて更に検討する必要があると思われる。また、上記の筆語資料の徂徠の質問において、徂徠は桜を「日本的櫻花」と言い、「日本的櫻桃花」とは言わなかったことから、徂徠は「櫻桃花」は「桜花」とは別な花だと知っているようにも見えた。しかし、それにも関わらず、徂徠は、桜は「櫻桃花」であるかどうかを悦峯に質問した。これは何らかの原因で徂徠にとって「桜花」と「櫻桃花」が混同されそうになり、それで、徂徠は疑問を感じ

¹⁴石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』、56頁参照。

たのではないかと思われる。徂徠と言えば、漢文の教養を持ちながら唐話もできる人であり、徂徠の言葉遣いは、漢文の教養による可能性もあり、唐話の知識による可能性もあるので、次に江戸時代における桜の花の中国語の呼称について、唐話資料と漢文資料を通して考察してみたい。

三、江戸時代唐話資料に見られる「櫻桃」と「櫻桃花」

1) 『華客答問録』に見られる「櫻桃」と「櫻桃花」

『華客答問録』は、写本が国立公文書館内閣文庫に所蔵されており、作者及び成立年代は共に不明である。しかしその内容から、成立年代は1719年から1722年の間だと推測できる¹⁵。『華客答問録』は内容が漢字によって一問一答形式で書かれており、各質問それぞれの冒頭に問答に使われた方言（漳州話、南京話、福州話）の種類が明記されている。内容は計20件の問答の内、南京話の問答は14件、漳州話の問答は4件、福州話の問答は2件である。問答の内容は中国に関する様々な話題であり、牡丹や櫻桃花、清朝の人の衣装と装飾などの日常的な話題も康熙帝の東宮の冊立の事や鄭芝龍と劉國賢（劉國軒の誤り）の子孫のことなどの中国の政治に関わる話題や、喇嘛教と喇嘛僧の宗教に関する話題や、絵画、儒学者の芸術、学問に関する話題もある。『華客答問録』の成立の背景は不明であるが、その内容を通して、江戸時代の日本は中国に対してどのような事に関心を持っていたかを知ることができる。とりわけ『華客答問録』はその記録に使用された方言の種類が明記されており、江戸時代の唐話の主流である南京話の他に、漳州話と福州話の記録も見られることは現存の江戸時代の唐話資料の中においては珍しい資料である。

『華客答問録』に「櫻桃花」に関する問答があり（以下は「櫻桃花問答」と称す）、この「櫻桃花問答」の内容と日本語訳は次の通りである。

問南京話

想必你們曾看見櫻桃花了。前邊唐人看見日本的櫻桃花叫做海棠，又叫做杏花，其實不曉得櫻桃花。然而宋景濂有一句說道：愛櫻日本勝於唐。其外。古人詩句裡頭說櫻桃花的人也多，據此看來，唐山自然有的，難道是沒有？或者，唐山日本的不同有兩樣？還是唐山的櫻桃

¹⁵ 蔡雅芸「『華客答問録』から見る江戸時代の言語接触」、『アジア文化交流研究』第4号、647頁。

花都是日本の山櫻桃花之類乎？不知怎麼樣？

桜の花を見たことがあるはずと思いますが、以前、唐人は日本の桜桃花を見て海棠、または杏花と言って、実は、それは桜桃花だということは知りませんでした。しかし、宋景濂には「愛櫻日本勝於唐」という一句があつて、この他にも古人の詩句にも桜桃花の花を言ったものも多いことから、唐山にも桜桃花あるはずですが、まさか、桜桃花はないということはないでしょう。或いは、唐山のそれと日本のとは違いますか。それとも唐山の桜桃花は日本の山桜の類のものなののでしょうか、どうでしょうか。

答 日本那樣的櫻桃花唐山沒有。唐山的櫻桃花就是日本の山櫻桃花之類，花葉是差不多。海棠、杏花另是一種，不日本櫻桃花那樣的。日本那樣的櫻桃花唐山沒有。唐山的櫻桃花都是山櫻桃花之類。

日本の桜桃花のようなものは唐山にはない。唐山にある桜桃花は即ち、日本の山桜の種類のもので、花と葉っぱはあまり差がない。海棠、杏花は他の種類のもので、日本の桜桃花のような花ではない。日本の桜桃花のような花は唐山にはありません。唐山の桜桃花は、すべて山桜の種類のものです。

上記の「櫻桃花問答」の内容から分かるように、この問答のきっかけは日本の桜の花と同じ花が、中国にもあるかどうかについての日本側の疑問である。この問答に日本側から日本の桜の花を「櫻桃花」と言っているのは徂徠とは異なるが、桜の花は中国の海棠の花であるかどうかという質問は、徂徠の質問と同じである。また、中国人の回答に「山櫻桃花」というのがあり、これを問答の筋から考えると、もし、「櫻桃花」は桜の花であれば、「山櫻桃花」は即ち「櫻桃花」の上に「山」を付け加えたものなので、「山櫻桃花」は日本の山桜の花だと考えられる。また、「櫻桃花問答」に宋景濂の詩句が言及されおり、この宋景濂の詩句について調べれば、その原詩が『鄰交徵書』¹⁶に見られており、全文は「賞櫻日本勝於唐如被牡丹兼海棠，恐是趙昌所難畫，春風才起雪吹香」¹⁷とある。ところが、この詩の題名は何であるかということ、その題名は「櫻花」であり、つまり、「櫻桃花問答」の日本側の人は、宋景濂の詩句を知っているのなら、「櫻花」という言葉も知っている可能性が高い。ところが、それにも関わらず、「櫻桃花問答」は「櫻花」ではなく、「櫻桃花」をもって会話を進めていったことは面白い。言い換えれば、「櫻桃花問答」において「櫻花」という詞は文面には出ていないが、宋景濂の詩が言及されたこと

¹⁶ 伊藤松『鄰交徵書』、国書刊行会、1975年8月。

¹⁷ 伊藤松『鄰交徵書』、494頁。

より、「櫻花」という詞の影がかすかに見えているのではないかと思われる。

2) 『唐話辞書類集』に見る「櫻桃」と「櫻桃花」と「サクラ」

① 『唐話辞書類集』

『唐話辞書類集』は、長沢規矩也氏の編集のもとに汲古書院が1969年に出版した唐話関係の資料集である。¹⁸全二十冊からなる。そこには、「唐話類纂」「胡言漢語」「怯里馬赤」「語録譯義」「唐話為文箋」「忠義水滸傳解」「忠義水滸傳抄譯」「忠義水滸傳鈔譯」「水滸傳批評解」「爾言解」「色香歌」「劇語審議」「唐人問書」「崎港見聞録」「南山考講記」「常話方語」「唐話纂要」「唐音雅俗語類」「唐譯便覽」「唐話便要」「兩國譯通」「唐音和解」「唐音世語」「語録字義」「宗門方語」「碧巖雄録方語解」「八僊卓燕式記」「徒杠字彙」「俗語解」「明律考」「應氏六帖」「水滸傳譯解」「忠義水滸傳語解」「忠義水滸傳語釋」「水滸傳字彙外集」「公武官職稱名」「詞畧」「奇字抄錄」「雜纂譯解」「字海便覽」「訓義抄錄」「支那小説字解」「中夏俗語藪」「漢字和訓」「授幼難字訓」「學語編」「麤幼略記」「華語詳譯」「官府文字釋義」「游焉社常談」「譯通類畧」「譯官雜字簿」「滿漢瑣語」「雜字類譯」「中華十五省」「譯家必備」「水滸傳記聞」が収められている。全資料に編集者の長沢規矩也氏の解題が付されている。

② 「櫻桃花」

『唐話辞書類集』は唐話資料を現在のところ最も限に一番量的にまとめたものであり、江戸時代の唐話を概観するのに欠かせない資料集である。そこで本稿は、『唐話辞書類集』を通して、桜の花は唐話で何というかについて考察した。その結果、江戸時代の資料の内、「應氏六帖」¹⁹、「唐音和解」²⁰、「唐音世語」²¹、「漢字和訓」²²、「南山考講記」²³、「学語篇」²⁴、「訳家必備」²⁵の七つの資料に桜と関連のあるものとして、「櫻桃」と「櫻桃花」と「サクラ」の語例が見られた。

¹⁸ 『唐話辞書類集』、汲古書院、1969年7月。

¹⁹ 『唐話辞書類集』第12集。

²⁰ 『唐話辞書類集』第8集。

²¹ 『唐話辞書類集』第8集。

²² 『唐話辞書類集』第16集。

²³ 『唐話辞書類集』第5集、433頁。

²⁴ 『唐話辞書類集』第17集、388頁。

²⁵ 『唐話辞書類集』第20集、224頁。

これらの語例をまとめると下記の表1となる²⁶。なお、表1の各資料の成立年代については『唐話辞書類集』各冊の長沢規矩也氏の解題を参考した。

表1 江戸時代唐話資料に見られる「櫻桃」と「櫻桃花」と「サクラ」

資料	年代	語例	読み	解釈（和名）
「應氏六帖」	宝永三年（1706）	櫻桃 ²⁷	ユスラ	
「唐音和解」	享保元年（1716）	海棠 ²⁸	ハイタン	桜 読み注記：サクラ
「漢字和訓」	享保三年（1718）	花木 ²⁹	右：サクラ 左：コノハナ	鎮座本縁○喜撰式 ニハ梅花トアリ
「唐音世語」	宝暦四年（1754）	櫻桃花 ³⁰	インターホハ	サクラ
同上	同上	櫻桃花 ³¹	インターホハ	サクラ
「南山考講記」	明和四年（1768）	櫻桃花 ³²	サクラ	
「學語篇」	明和九年（1772）	櫻桃 ³³	ユスラモモ	
「訳家必備」	寛政7年（1795）	櫻桃花 ³⁴		

表1から明らかなように、「唐音和解」に「海棠（ハイタン）」が「桜（サクラ）」と解釈されていることから、江戸時代の唐話の世界において、確かに桜は海棠だと認識されたことがあったことがわかる。このような認識が生じた原因を考えると、「櫻桃花問答」の内容に見られたように、日本に来航した中国人の中に桜を見て海棠だと言う中国人がいたからではないかと考えられる。

「櫻桃」に関しては、「櫻桃」は「應氏六帖」においては「ユスラ」、「学語篇」においては「ユ

²⁶ 『唐話辞書類集』に収められた資料に明治時代のもの及び成立年代不明なものも含められたれおり、表一はこのような例外を除外し、江戸時代の資料から見出した例のみをまとめた。

²⁷ 『唐話辞書類集』第12集、469頁。

²⁸ 『唐話辞書類集』第8集、95頁。

²⁹ 『唐話辞書類集』第16集、200頁。

³⁰ 『唐話辞書類集』第8集、180頁。

³¹ 『唐話辞書類集』第8集、185頁。

³² 『唐話辞書類集』第5集、433頁。

³³ 『唐話辞書類集』第17集、388頁。

³⁴ 『唐話辞書類集』第20集、224頁。

スラモモ」と注記されており、「ユスラ」は、「ゆすらうめ」だと考えられるが、「ユスラモモ」は何の植物なのかは不明である。恐らくこの「ユスラモモ」という語例は「櫻」を「ユスラ」と解し、そして、「櫻(ユスラ)」と「桃(モモ)」の組み合わせで「ユスラモモ」となったのではないかと推測できる。一方、「櫻桃花」の語例は、「唐音世語」と「南山考講記」と「譯家必備」の三つの資料に見られており、「唐音世語」と「南山考講記」は「櫻桃花」が「サクラ」と解釈されている点においては一致している。これで、江戸時代の唐話において「櫻桃花」は即ち桜であることがわかった。なお、『唐話辞書類集』に見られる「櫻桃」と「櫻桃花」と「サクラ」を通して言えることは、江戸時代の唐話において、「櫻桃花」は桜であり、「櫻桃(ゆすらうめ)」に「花」を付け加えた「ゆすらうめの花」ではないようである。

ところが、『唐話辞書類集』に「櫻桃」と「櫻桃花」と「サクラ」が見られたが、「櫻花」という詞が全く見られていないことから、江戸時代日本において、「櫻花」という詞は、桜の中国語の口語表現として使われていなかったか、或いは使われたことがあっても普遍的に使われている詞ではなかったと考えられる。

四、『鷺峰林学士文集』³⁵に見られる「櫻桃」と「櫻花」と「白櫻」

江戸時代の儒学者や漢学者と言えば数が多く、すべての学者の漢文体で書いた文章を全部調べ尽くすことは至難の技だと思われる。とりわけ桜の花の場合は、ただ「花」の一文字で表現されることも多く、植物に関心の薄い人の場合は、文章の中で言及しない場合もあると思われるため、能率的に見出すことは難しい。

ところが、江戸幕府の代表的な儒学者である林羅山の息子で、三代将軍徳川家光に仕えた林鷺峰(1618-1680)の『鷺峰林学士文集』によると、鷺峰が植物に強い関心を持っていたようで、彼の文章の中に植物の名称について多く言及している。『鷺峰林学士文集』の「櫻下問答」に、鷺峰と童子の桜についての問答がある。そこで「櫻下問答」をはじめ、『鷺峰林学士文集』を通して、桜または桜が日本人の漢文の中でどのように表現されているかを考察し、また、桜に混同されやすい「櫻桃」についても考察したい。

『鷺峰林学士文集』全120巻を調べた結果、桜は文章の中で殆ど「櫻」、または「櫻花」で表現されており、この結果から、日本の桜は文語の中国名は「櫻花」であることが分かり、口語の中国名「櫻桃花」とは異なっていることがわかった。

一方、『鷺峰林学士文集』において、「櫻桃」は三例、「白櫻」は一例しか見られておらず、その例を次に挙げよう。

³⁵ 『鷺峰林学士文集』上、下二冊、ペリかん社、1997年10月。

1) 「櫻桃」

例1 庭前有櫻樹一株其花淡紅微白、頃日開敷爛熳然……一日、偶道遥花下吟詠佇立、童子進歩問曰：曾聞本朝百花之中不斥其名而稱花者唯櫻而已猶洛之牡丹蜀之海棠其然乎。曰：是也。牡丹、海棠中華人人賞之、詠之。如櫻花者纔聞王安石「山櫻抱石映松枝」之句。然或以為櫻桃、則未必知為我朝之花欵。其不被取於中華者如此、何為擅美於本朝哉。余曰：噫、汝言過矣。梅花盛於江南北人不識、牡丹貴於洛陽褒斜以之為薪則雖同軌之中猶有所取捨、況於殊域乎。夫櫻花之美几有目者無不知之何必舐中華之涎哉。曰：然則請聞其所以不斥名也。……『鶯峰林學士文集』卷六十、「櫻下問答」³⁶。

例2 櫻峰者何也、忍岡別號也。何春無櫻、何處無櫻、獨為此岡之號者何也。有所據有所慕也。所據所慕者何也。頃間見得羅浮山有櫻桃峰、此其所據也……『鶯峰林學士文集』卷三、「櫻峰記」³⁷。

例3 良塾之庭纓花爛熳、皆是先考遺愛也。據羅浮山有櫻桃峰以為良塾之額……『鶯峰林學士文集』卷百二十、「稱號義述」³⁸。

例1から、文章の中で鶯峰は桜を殆ど「櫻」、或は「櫻花」で記していることがわかる。また、桜の「櫻桃」という呼び名が童子から鶯峰に伝わっていると思われる。例2と例3から、「櫻桃峰」は忍岡の別称であることが分かる。ところが、例2の出所の文章の題名は「櫻峰記」とあるのに、文章の中においては「櫻桃峰」となり、つまり、「櫻」は「櫻桃」とも成り得ることから、鶯峰は桜を「櫻桃」と言う呼び名を全く知らない訳ではない。言い換えれば、鶯峰は桜に「櫻桃」というもう一つの呼び名があることを知りながら、文章において桜の花を「櫻花」と記した。

2) 「白櫻」

³⁶ 『鶯峰林學士文集』下、53頁。

³⁷ 『鶯峰林學士文集』上、76頁。

³⁸ 『鶯峰林學士文集』下、600頁。

『鶯峰林学士文集』卷九十一、「六十花唐詩屏風凡例」において、鶯峰は「世俗或言白櫻不被稱於唐、故取于鄴詩示本朝以櫻花譬雪與中華暗合」³⁹と述べている。于鄴の詩について調べたところ、『全唐詩』に于鄴の「白櫻樹」という題名の詩があり、詩の全文は「記得花開雪滿枝、和風和蝶代花移、如今花落遊風去、空作主人惆悵詩。」である⁴⁰。

以上のように『鶯峰林学士文集』を通して江戸時代の日本においては、漢文においても桜の「櫻桃」という名称が使われていたが、基本的には漢文即ち文章語の場合、桜は「櫻花」と称されたことが多いことがわかった。この点については、桜は唐話で「櫻桃花」と称されていることとは異なっている。

五、おわりに

上述のように、『華客答問録』、「荻生徂徠新黄檗章悦峯筆語」、『唐話辞書類集』、『鶯峰林学士文集』を通して、江戸時代の日本における「桜」の中国名について考察した。その結果、まずは江戸時代において、確かに「桜」は「海棠」だと認識されていることもあったことがわかった。また、『唐話辞書類集』において「櫻桃」は「ゆすらうめ」であり、「櫻桃花」は「桜」であるように、両者は別々に認識されていたようである。なお、『唐話辞書類集』に「櫻花」という詞が見られていないことについて、「桜」は漢文において「櫻花」だと称されていたことから、江戸時代において、「桜」の中国語名の文語的表現は「櫻花」であるのに対し、口語的表現は「櫻桃花」であることが判明した。

このように、江戸時代の日本において伝統的に書籍を通じて受容した文語を中心とする漢語・中国語と、長崎貿易に関連して受容された口語・白話による漢語・中国語受容の大きな二形態あり、その受容形態における語彙認識の拮抗する状況の一端がこの「櫻桃花」の問題を通じて垣間見ることが出来るであろう。

³⁹ 『近世儒家文集集成』第十二卷『鶯峰林学士文集』下、1997年10月。

⁴⁰ 『全唐詩』第二十一冊、中華書局、1960年4月、8314頁。